教科書文庫
4
810
32-1926
2000018281

高等小學讀本 卷一

文部省

43107
教科書文庫
4
810
32-1926
2000.0
1828

教科書文庫
4
810
32-1926
2000018281

高等小學讀本 卷一

文部省

広島大学図書
2000018281

資料室
37559
M014

廣島大學圖書之印
廣島大學圖書之印
廣島大學教 18281 圖書

目録

第一課　昭憲皇太后御歌……一
第二課　太田道灌……四
第三課　ポチ……八
第四課　蒔かぬ種は生えぬ……十二
第五課　盤珪禪師……十六
第六課　野火止の用水……十八
第七課　洞庭湖……二十二
第八課　契約……二十六
第九課　山村……三十
第十課　人を周旋する手紙……三十八
第十一課　笑話……四十
第十二課　フェルヂナンド、マゼラン……四十一
第十三課　眞の知己……五十一
第十四課　西洋紙の製造……五十五
第十五課　海の朝……五十九
第十六課　征衣上途……六十一
第十七課　賴山陽……六十六
第十八課　象狩……六十九
第十九課　南洋の珍果……七十三
第二十課　綱引……八十
第二十一課　廣瀨武夫の手紙……八十三
第二十二課　漁船歸る……八十六
第二十三課　かぶと蟲……九十二
第二十四課　スパルタ武士……九十七
第二十五課　統計……百三
第二十六課　筏流し……百十
第二十七課　瀧澤馬琴の苦心……百十五
第二十八課　やまあらし……百二十一
第二十九課　足柄山……百二十五
第三十課　故郷……百二十七

高等小學讀本　卷一

第一課　昭憲皇太后御歌

人知れず思ふ心のよしあしも
　照らし分くらん天地の神

怠りて磨かざりせば光ある
　玉も瓦にひとしからまし

日の本のさかひ離れてゆく船に

國の光も載せてやらまし

持つ人の心によりてたからとも
あたともなるは黄金なりけり

神風の伊勢の内外の宮柱
ゆるぎなき世をなほ祈るかな

朝毎にむかふ鏡のくもりなく
あらまほしきは心なりけり

なごりなく霞ははれて朝ひばり
あがるかぎりも見ゆる空かな

夏草の茂みが中にまじれども
なほしな高し姫百合の花

柿の實の色づく軒に霧たちて
めじろ鳴くなり秋の山里

あかつきの雲吹拂ふ木枯に
かゞやく星の影のさやけさ

第二課　太田道灌

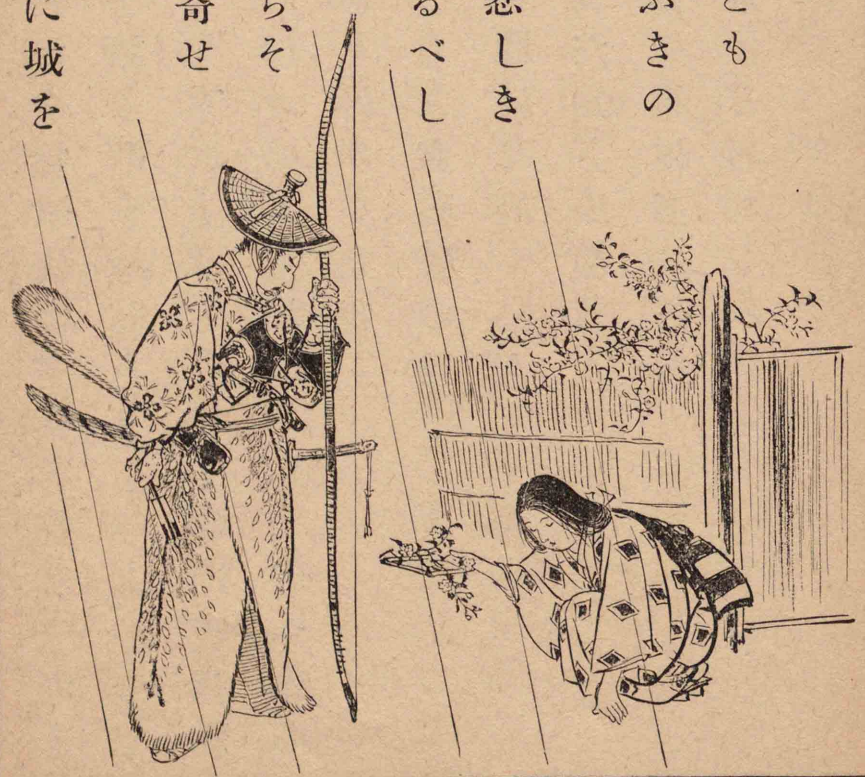
古の眞の武士は文武二道に心掛けたり。されば戰國爭亂の世にも、風流のたしなみありし人少からず。太田道灌の如きも其の一人なり。

道灌は初め左衞門大夫持資といひ、上杉定正の家臣なり。幼時より氣力盛にして人に屈せず、武道を好みて、末恐しき少年よとうはさせられぬ。壯年の頃鷹狩に出で、雨にあひてとある民家に入り、雨具を借らんとするに、少女出で來りて、一言の答もなく山吹の花一枝を差出す。持資其の意を解せずして歸りしが、後或人の語りて、それは

七重八重
花は咲けども
やまぶきの
みの一つだに
無きぞ悲しき

といふ古歌の心なるべしといふを聞きて、始めて身の無學を恥ぢ、それより文學に心を寄せたりとぞ。

後武藏國江戸の地に城を



築き、城内に文庫を設け、史籍・歌集・醫書・兵書等數千卷ををさめ、暇あれば書を讀み歌を詠じたりといふ。かつて將軍義政に見えんとて京に上りし時、後土御門天皇勅して武藏野の様を問はせ給ふ。道灌歌を以て答へ奉る。

露おかぬ方もありけり夕立の
空よりひろき武藏野の原

又隅田川の都鳥はと問はせ給ふに、

年ふれどわがまだ知らぬ都鳥
隅田川原に宿はあれども

さらば汝が館の風景はとありしに、

我がいほは松原つゞき海近く

富士の高根を軒端にぞ見る

と答へ申ししかば、叡感淺からず、御製を下し給ふ。

武藏野はかるかやのみと思ひしに
かゝることばの花や咲くらん

或時の戰に、定正に從ひて夜海岸を通りしに、定正潮の滿干を知らず。道灌いふ、潮干たり、たやすく進むべしと。定正其の故を問へば、道灌

遠くなり近くなるみの濱千鳥
鳴く音に潮の滿干をぞ知る

といふ古歌ありと答へたり。

道灌の築きし江戸城は、後德川氏之を修築して、歷代將

軍の居城とし、當時の松原つゞきの寒村は、何時しか繁華なる江戸の都會となれり。星霜四百年、明治の大御世に宮城を此處に定め給へるは、道灌の名譽此の上なしとやいはん。

第三課　ポチ

僕は元來動物好きで、とりわけ犬は大好きだ。

犬好きは犬が知る。犬ぎらひの父が呼んでも、ポチはほんのちよつとお愛想に尾を振るばかりで、振向きもしない。母が呼ぶと、ふだん食事の世話になる人だから、又何かもらへるかと思つて、目をかゞやかしてとんで來る。さうして母の手中にそれらしい物があれば、兎のやうにはねて喜ぶが、唯それだけの事で、其の時のポチはやはり犬に違ひない。

其の犬に違ひないポチが僕に向ふと、犬でなくなる、それとも僕が人間でなくなるのか、とにかく僕とポチの間には人畜の差別が無くなつてしまふ。

ポチは朝起だから、僕が起きる時分にはもう一しきり遊んだところだが、僕の聲を聞きつけると、何處に居ても一もくさんにとんで來る。僕もにこ〳〵して急いで庭へ下りる。と、ポチはすかさず泥足で飛びつく。僕はうれしくて抱上げてやる。ポチは抱かれながら大あばれにあばれる。父や母が顏をしかめて、きたない〳〵とい

ふ。なるほど考へてみればきたないやうではあるけれども……。

ポチもやつとこれで氣がすんだといふ形で、また庭先をうろ〳〵し出して、緣の下などをのぞいてみる。と、其處にわらぢ蟲の一ぱいたかつた古ざうりか何かがある。好い物を見つけたと言ひさうな顏をして、それをくはへ出して來て、首を一つ振ると、ざうりは横飛にぽんと飛ぶ。すかさず追つかけて行つて、又くはへてぽんとはふる。そんなたわいもない事をして元氣よく遊ぶ。

其のひまに僕は顏を洗ふ、飯を食ふ。それがすむと、今度は學校へ行く段取になるのだが、此の時が一日中で僕

の一番苦しい時だ。ポチが後を追ふ。うつかり出ようものなら、何處までも〳〵ついて來て、追つたつてどうしたつて歸らない。こつそり出ようとしても、出掛ける時刻をちやんと知つてゐて、其の時分になると、何時の間にか玄關先へ廻つて待つてゐる。仕方がないから、しまひにはつかまへて、いやおうなしに格子戸の内へ入れて置いては出るやうにしてゐるが、さうすると前足で格子をひつかいて、悲しい鳴き聲を立てて後をしたひ、僕の姿が見えなくなつても鳴き止まない。僕も同じ思だ。泣出しさうな顏をして、ばた〳〵とかけ出し、聲の聞えない處まで來て、やうやくほつとして、なみの足どり

になる。（長谷川辰之助「平凡」ニ據ル）

第四課　蒔かぬ種は生えぬ

「蒔かぬ種は生えぬ」といふ諺は、誰でも知つてゐることであるが、生物界の現象中には、ともすると蒔かぬ種が生えるやうな考を起させることがある。それで今でも世間には、往々のみがわくとか、しらみがわくとか言つてゐる人がある。もつともかういふ考は我が國ばかりでなく、何處の國にもあつたのであるが、二三百年以前から追ひ〳〵實物に就いて物を研究する風が起り、又顯微鏡を用ひて細かい物を調べることが出來るやうになつた結果、だん〳〵其の誤であることがわかつて

來た。例へば昔は、うじといふものは、肉などが腐ると自然に其處にわくものであると信じてゐた。ところがイタリヤのレヂといふ學者が、細かい金網で肉をおほつてはへが附かないやうにして置いたところが、幾日過ぎても、どんなに肉が腐つても、うじが一ぴきも生じなかつた。そこでうじは決して腐つた肉からわくものではなく、全くはへが來て產みつけた卵が孵つたのであるといふことが確になつた。かうして實物に就いてだんだん研究してみると、元は自然にわくと思はれてゐた蛔蟲やさなだ蟲も、種なしに生ずるものではないといふことがわかつて來た。

又山間に新しく掘つた池などに、鰻が居たりしゞみが居たりすることがある。ちよつと考へると、鰻やしゞみがかういふ池に居るやうになるのは、全く其の場所にわいたとしか思はれない。しかしよく調べてみると、やはりわいたのではなく、外から來たのである。鰻は元來海中で孵るもので、初は透明な白魚のやうなものであるが、だん〳〵體がしまり、色も次第に黑くなつて、いはゆる針鰻になる。此の針鰻は幾千も幾萬も群をなして川をさかのぼり、次第に細い溝などへ進み、雨でも降れば、路上や草の間の水たまりを傳はつて、何處までも進んで行く性質を持つてゐる。であるから鰻は山間の新しい池にでも達することが出來るのである。又しゞみのやうな貝類は、其の二枚の殼で、がん・かもなどの羽毛や足に附着することがあるから、餘程隔つた處までも運ばれて、其處で繁殖することは決して珍しいことではない。

生物學上「蒔かぬ種は生えぬ」といふことがわかつたお陰で、人間の生活の上に大きな利益がもたらされた。近來發達した消毒法や食物を罐詰にして長く保存する方法なども、全く此の理を實地に應用したものである。若し病氣や腐敗のもととなる微細な生物が、種がなくても自然にわくものであつたら、かういふ方法は何の

役にもたゝないはずである。（丘淺次郎「博物叢書簡易動物學」ニ據ル）

第五課　盤珪禪師

盤珪禪師は播磨國龍門寺の住持にして、識德一世に高く、教を請ふ者常に門に滿てり。或年佛道修行の催ありし時、來り集る者頗る多かりしが、其の會衆中、金品を失ふ者數人に及べり。然るに間もなく一僧の所爲なることと明らかとなりしかば、會衆一同禪師に言ひて、直ちに之を追放せんことを請ひぬ。禪師「よし〳〵」と其の旨を聞入れしかど、更に追放のことなかりければ、數日の後、會衆は總代を以て再び此の事を言出でたり。禪師、此の度も「よし〳〵」と承諾したるのみにて、少しも彼の僧を

追ふ樣子なし。かゝること尚三度四度に及びしかば、會衆大いに立腹し、「若し彼の僧を追放し給はずば、我等は一人も殘らず退散致すべし。」と言出でぬ。其の時禪師一同に向ひて、「退散したしとならば、心のまゝに退散せらるべし。御身等の如く修行を積み行正しき人々は、何處に行きても宜しかるべし。されど彼の僧は、我捨去らば誰か之を教へ導くべき。此の度の催の如きも、かゝる惡心ある者を教化せんためなれば、盜をしたればとてみだりに追ふべきにあらず。」と諭しければ、會衆も大いに感じて、申出を取下げたり。彼の僧も亦此の次第を聞きて、禪師の德に感泣し、己が前非を悔い、一同の前に出で

て涙ながらに惡事を懺悔し、其の後道德堅固の僧となりしとぞ。

第六課　野火止の用水

東京の西北數里に野火止といふ處がある。今は埼玉縣北足立郡大和田町に屬してゐるが、見渡す限り打續く畠の間には、森あり丘あり家あり流あり、春は菜の花麥の綠、秋はすゝきの波雜木の紅葉、武藏野の面影が今に殘つて、見るからに野趣に滿ちた眺である。昔此の附近一帶は、彼の智慧伊豆といはれた松平信綱の領地で、其の菩提寺平林寺も此の野火止にある。

平林寺の門をくゞつて、薄暗いばかりに茂つた楓の下

を進むこと約二町、本堂について右折すれば、杉や檜の生ひ茂つた林の奥に、信綱の靈は靜かに眠つてゐる。敷石の苔をふんで此處に詣でる者は、あたりの靜かさを破つて、玉の如き水が勢よく流れてゐるのを見るであらう。有名な野火止の用水とは卽ちこれで、此の水を引くに就いては、おもしろい話が今に傳へられてゐる。

元來野火止一帶は、土地高く、水利に缺け、土やせて、見るからに貧しい村であつた。信綱が川越城主として此の地を領してゐた時、代官安松金右衞門は、新に堀を掘つて玉川の水を引けば、必ず田畑が出來ると申し出た。そこで信綱が其の費用の見積を尋ねると、三千兩あれば

よいといふ。當時の三千兩は非常な大金であるが、信綱は、此の爲に後々の人まで利益をうけることが出來るならば幸であると、直ちに堀を掘ることを安松に命じた。安松は命を奉じて數百人の人夫を督し、いよ〳〵工事に着手した。さうして今の中央線立川驛の北方一里ばかりの處から、此の野火止を過ぎ、志木町の新河岸川まで六里の間に堀を通じて、玉川の水を引くことにした。

工事はやがて見事に落成したが、しかし意外にも一滴の水も流れて來ない。信綱は之を見て安松をなじると、安松はとにかく明年までの猶豫を願ひ出た。が、翌年に

なつても水はやはり來ない。こゝに至つて信綱は、安松が地勢の高低を考へずに工事を進めたものとして、其の手落を責めたが、安松は尙自分を信じて疑はない。元來此の附近は土地が乾き風が烈しいために、これまで非常に土ぼこりが多く、客のある場合には、必ず座敷を掃いて入れなければならなかつた。然るに今年はそんな事が全くない。のみならず、野菜の出來のよいことも例年と異なつてゐる。これは水分が地をうるほしてゐるためで、確に彼の堀のお陰に違ひない。何とぞ更に一年の猶豫をと願ひ出た。然るに翌年の夏、一夜大雨が降ると、奔流が水音高く進み來つて、忽ち六里の堀にみな

ぎつた。信綱は始めて安松が自ら信ずることの強いのに感歎し、且厚く其の功を賞したといふ。

草ひいで木茂り、見渡す限り豐かな田畑の間を過ぎて平林寺に詣でる者は、たゞに春の花や秋の紅葉を賞するばかりでなく、今なほ流れて盡きぬ用水に對して、當年の苦心をしのび、功績のあつた人々に深い感謝を捧げねばならぬ。

第七課　洞庭湖

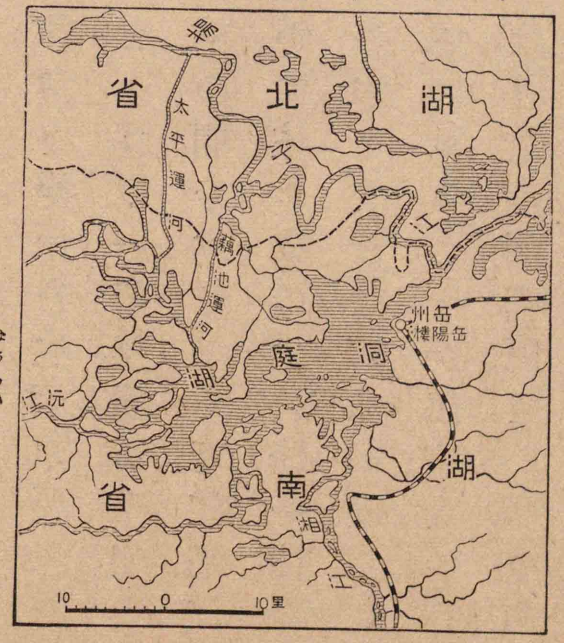
洞庭湖は支那湖南省の北部に横たはる大湖で、我が國人にも昔から其の名はよく知られてゐる。さうして有名な岳陽樓の記などによつて、我々は一望千里大洋の

如き風光を想像してゐる。なるほど大きいには違ひないが、此の湖は季節の移り變るに隨ひ、水量が著しく增減するので、水面の廣さに非常な變化を生ずる。

試みに冬の洞庭湖を見ると、それは一望無邊の干潟とでもいつたらよからうか、其の間を水やせた沅江・湘江其の他の諸川が流れて、僅かに往き來の船に路を開いてゐる。處々に小さい湖程の水たまりはあるが、はてしも知らぬ漫々たる湖水は遂に見ることが出來ない。これでは洞庭湖といふよりは、むしろ洞庭原といつた方が適切であるかも知れぬ。

ところで嚴冬一度去つて、揚子江水源地方の雪や氷が

解け、江水がだん〳〵増して來ると、其の水の一部は湖の北方、太平・藕池等の運河を通じて南に流れ、四五月頃には、既に湖中諸川の水が兩岸を越えて廣がり、どうやら一帶が湖らしくなつて來る。更に晩春から初夏にかけて降續く雨に、揚子江はいやが上にもみなぎり、湖南の諸川も亦増水して此の湖に注ぐので、七八月頃には、かの茫々たる洞庭原は洲も川も水たまりも悉く一面の水中に沒して、こ



こに漫々たる大湖水を現出する。

かういふ風であるから、湖面の廣さは常に一定してゐない。水量が數尺増すと湖の水は數里の外に廣がり、數尺へると十數方里の土地が現れる。増水期中には東西・南北ともに二十五里といつてゐるが、勿論大體の數字に過ぎない。増水中でも深さは一般に淺く、諸川の水路をなしてゐる處だけがやゝ深いので、船はそれをたどつて航行する。若しだん〳〵減水する秋の頃、過つて船を淺瀬に乘上げたら、それこそ大變である。下さうとしてゐる間に水は一刻々々と減じて、船の乘上げた淺瀬は陸地となり、忽ち丘となつてしまふ。船は進退きはま

つて、其のまゝ來年の增水期を待たねばならない。かういふ船を冬季水かれて後に見ると、三四十尺の高地に安閑として横たはつてゐる。

洞庭湖は、實に揚子江の水の急激な變化を緩和する一大貯水槽である。江水が一時に增加すると、其の水の一部を此の湖が收め、充滿するに及んで、徐々に元の揚子江に吐出す。若し此の湖が無かつたら、揚子江沿岸に於て年々起る洪水は更に急激におそつて來て、一層大なる損害を與へるであらう。天然のたくみもこゝに至れば甚だ巧妙といふべきではないか。

第八課　契約

約束を守らねばならぬといふことは、我々がとくに教へられ、常に實行してゐるところで、我々の社會共同生活上極めて大切なことである。故に法律では之に關する規定を設けて、其の實行を强制してゐる場合がたくさんにある。殊に約束は普通經濟上の問題に關して結ばれることが多いから、法律は主として此の關係に就いてくはしい規定をしてゐる。法律では約束のことを契約といひ、それを實行することを履行といひ、契約をする雙方の人々を契約當事者といふ。

契約に就いて其の原則を規定してゐる法律は、民法である。民法では、賣買・貸借・雇傭・請負等諸種の契約を規定

してゐる。しかし契約はこれだけに限るわけではないから、民法以外の法律にも、其の他種々の契約が規定されてをり、又法律に規定が無くとも、我々は隨意な内容の契約を結ぶことが出來る。けれども法律が斯くの如く契約の自由を許すのは、畢竟共同生活の便益の爲であるから、公の秩序、善良の風俗に反するやうな契約は、効力を認められないのみならず、公益の爲には、契約の自由が制限されることも珍しくない。大正十二年九月の關東大震災後暴利取締令が出て、たとひ買手があつても、食料品・建築材料其の他を不當に高く賣つてはならぬと禁止されたのは、其の一例である。

契約には多くの場合證書が作られるが、證書は結局證據に過ぎないものであるから、證書の有無によつて履行の責任には變りがない。賣買其の他多くの契約は、當事者雙方が義務を負つてゐるいはゆる雙務契約であるから、契約の各當事者は、自分の方の義務を履行しない中は、相手方の義務の履行を迫ることは出來ない。又契約を履行するには、其の文言通りにしたといふだけでは不十分である。なるだけ相手方の迷惑にならないやうに、誠實信義の精神を以て履行せねばならぬ。例へば數量の多い貨物を任意な時に引渡すといふ契約をしたにしても、相手方の家に取込のあるのもかまはず

持込んだら、それは誠實信義を缺いた行爲である。此の點をよく理解して、互に相手方の利益を斟酌するやうにさへ心掛ければ、契約の締結にも無理がなく、其の履行も圓滑に行はれる。斯くして一つ〳〵の契約が圓滿に締結履行されることが積り積れば、やがて社會共同生活の圓滿をもたらす。約束を守ることは大切な道德上の義務であり、大切な法律上の義務である。

第九課　山村

面積三方里といへば廣いやうにも聞えようが、九分通りは山である。其の山あひを縫つて左折し又右曲しながら、南から北へ流れ去る大川に沿うて散在する花澤・石原・根尾・川邊・月野といふ五つの山間部落を一村に合はせて、川邊村と呼ぶ。これが僕の村である。

どちらを向いても五町・六町、十町とは見渡しのきかぬ山懷に、家といへば、やつと屋根の見えるものまでを數の中に入れても、十軒とは一目に見ることが出來ない。唯一番戸數の多い川邊は、眞直な新道に沿うて家が四五十軒、いはば此處が一村の中心で、學校もあれば役場もある。豆腐屋・菓子屋・酒屋、さては何でも屋の荒物屋が二三軒、ちよつと町の體裁をしてゐるので、物好きな菓子屋の主人が、入口の障子に筆太に「川邊町」と書いてから、誰言ふとなく「町」といふやうになつたと聞いてゐる。

「うぐひすは冬至から鳴くものだ。」とよく祖父はいふが、山里に春はなか〳〵おとづれて來ない。根尾の正林寺に梅の咲く頃も、尙時々雪が降る。東京から來る子供雜誌の口繪を見ると、元日からたこあげやはねつきをしてゐるが、春の遲い山里の少年・少女は、斯うした繪をむしろ不思議に思ふ。

春が遲いだけに春がうれしい。谷間々々の雪が消えて、麥が日增にのびて行く頃には、土筆が出る、れんげ草が咲く。日が一日々々と永くなつて、女の子は摘草、男の子はたこあげに夢中になる。山の木は松・杉・檜のときは木、其の他は栗・楢・楓などで、櫻はあまり無いが、それでも木の間がくれに咲く一本二本のゆかしい眺はある。

春も半ばを過ぎる頃から、山村は生氣に滿ちて來る。楓や楢の若葉が山々にもえ、蛙はおびたゞしく田の面に鳴く。田起し、種蒔と次第に忙しくなつて、男も女も馬も牛も田畑に出て働く。夏が來て麥の刈入も濟むと、やがて田植だ。見渡す限り水の一ぱいはられた田に、親も子も手傳の者も、早苗を手にして一せいに植出す。喉自慢の音頭に合はせた美しい田植歌が、田から田へと流れる。

此の頃から、朝はよく草刈に出かける。明初める頃、山裾のくさむらに、あたりの靜かさを破つて、さく〳〵、さく

さくと切味のよい鎌の音が聞える。と思ふと、露をふくんだ草は片端から倒れて、其處にはちまきをした若者か、ねえさんかぶりの少女の姿が現れる。一わたり刈取つて背負つて行く草の中には、きつと山百合の花の二三本がまじつてゐる。

炎天の田の草取はずゐぶん苦しいものだ。胸の邊までのびた稻の中に分入つて、燒けつくやうな日光を背に浴びながらこゞんで取るのである。風のない土用の眞晝、稻田の中はむつとする草いきれに、體中が汗びつしより、額の汗が兩眼に流れ込んで盲同樣になつたところを、いやといふ程稻葉の先で目を突く。湯のやうに熱

くなつてゐる泥水に突込んだ足には、何時の間にかたくさんのひるが吸附いてゐる。

田の草取の手傳もそこ〳〵に、此の頃の午後はよく川遊をする。青葉がくれの大川筋にさゞめく子供の聲を聞きつけては、もう魂を奪はれて、一もくさんに川端へ走る。大川といつても幅十間に足らぬ山川、水は淺いから泳は出來かねるが、それでも處々に、薄い青みを見せてよどんでゐる小さい淵があるぞ。ざんぶと飛込んでむちやくちやの犬かき、足を立ててても水は肩を越すか越さぬくらゐだ。急に體が冷えて寒くなると、ひなたに背を干しながら淺瀬の一部をせいて、其の中にごりなど

を放して興がる。

二百十日も無事に濟んで、稻の花が何時しか重さうな穗になる頃から、農家は又だん〳〵忙しくなる。鳴子・かかしが金色の波たつ田の面に立つて、群雀は此處から彼處、彼處から此處へと追ひやられる。早稻から順々に刈取られ、到る處に稻掛が組まれ、やがて農家の內庭に俵の山が一つ二つとふえて行く。

「今年も豐年だ。氏神樣のお祭には、何でも好きなものを買つてやるぞ。」

と父がほゝゑむ。僕たちの心の中には、もうお祭の笛や太鼓の音が鳴り響いてゐる。

秋晴の空に見上げる柿のこずゑの美しさ。てつぺんにさへづるもずの鋭い聲は、狹い山里に響き渡る。山々の紅葉が赤々と夕日にはえて、美しいと思つてゐる中に、朝夕うすら寒くなつて來て、時雨が降出す。せつかく待ちこがれたお祭にも、冷たい雨にちら〳〵雪がまじつて降ることが多い。

稻がすつかり刈取られて、水一滴も留めず干上つた田は、僕たちにとつて其のまゝ廣い運動場だ。何處をどうはね廻つても叱られる氣づかひはない。到る處に取殘されてある稻掛に登つて、透きとほる程すんだ冬の青空を望みながら、唱歌を歌ふ、器械體操のまねをする。雪

が降つて一尺二尺と積れば、藁靴をはいて銀世界の田の面を走り廻る愉快さ。「へ」の字「ろ」の字の跡をつけて、まだ興が盡きねば、雪ころがし、雪だるま、雪合戰。冬の山村は全く子供の天地である。

第十課　人を周旋する手紙

拜啓先日はわざ〳〵御來訪下され候處何の風情もこれ無く失禮の段惡しからず思し召し下されたく候さて其の節御依賴の小店員のことに就き二三心當りの者に相尋ね候に幸ひ隣村に子供を商家へ見習に遣はしたしと申す者これあり候早速先方に御話の趣を

傳へ候處殊の外乘氣に相成是非周旋致しくれよと申候右子供は次男にて昨年小學校を卒業致し其の後農事の手傳の傍そろばんのけいこなども致居候由身體も至極健全にて性質も快活順良の方に候へば御望には大體かなふものと存ぜられ候就いては近日中に本人同道御伺ひ致したく候間御都合よき日御一報下されたく尙委細の事は拜眉の節に譲り候頓首

返事

拜復早速適當なる候補者御捜し下され有難

く存候先日も申上候通り當方昨今手不足にて甚だ困り居候へば一日も早く取りきめたく御多用中御迷惑とは存候へども何卒來る十日御同道なし下されたく願上候先づは取りあへず御返事申上候草々

第十一課　笑話

壺

そさう者壺を買ひに行き、うつむけてあるを見て、「こんな口の無い壺があるものか。」と言ひながら、ひつくりかへし、「底も拔けてゐる。」

數珠

向ふより來る者、數珠をくびに掛け、大きなる笠を着たり。うつけ者之を見つけ、手を打つて感じ、「そなたが着たる笠は、殊の外大きい。何として其の數珠をくびに掛けられた。」と問ふ。「いや、これは先づ數珠を掛けてから笠を着たのぢや。」と言うたれば、「とかく物は聞いてみぬと。」

走り自慢

走ることを自慢にする者あり。或時盗人を追ひかけ行く。向ふより友達來り、「なんだく。」「盗人を追つかけてゐる。」「何處にゐる。」「あ、追越してしまつた。」

第十二課　フェルヂナンド、マゼラン

今から四百年ばかり前、ヨーロッパ諸國には航海熱が盛

になつて、新航路の發見や新陸地の探檢を試みる者が多かつた。ポルトガルの人フェルヂナンド、マゼランも其の一人で、世界周航の最初の偉業は實に彼によつて企てられたのであつた。

マゼランの生まれた年は詳でないが、西曆千四百八十年頃といはれてゐる。大膽で進取の氣象に富んでゐた彼は、時代の機運に動かされて、航海には深い趣味を持つてゐた。さうして若い頃から遠く印度やマレー半島の附近に航して、幾多の辛酸をなめ、實地の經驗を積んだので、航海に對する自信は非常に强かつた。

マゼランはかねて大西洋を西へ進んで、南洋のモルッカ諸島に出る航路を發見したいと望んでゐた。しかしポルトガルに於ては此の希望を實現することが出來なかつたので、隣國イスパニヤへ行き、時の王チャールス五世を說いて、遂に其の贊助を得た。

そこで彼は先づ大小五隻の船を用意した。次に乘組員の募集を始めたが、斯ういふ命がけの大冒險に參加しようとする者は殆どない。いろ〳〵骨を折つた結果、イスパニヤ・ポルトガル兩國人を主として、二百三十餘名の乘組員をやうやく集めることが出來た。

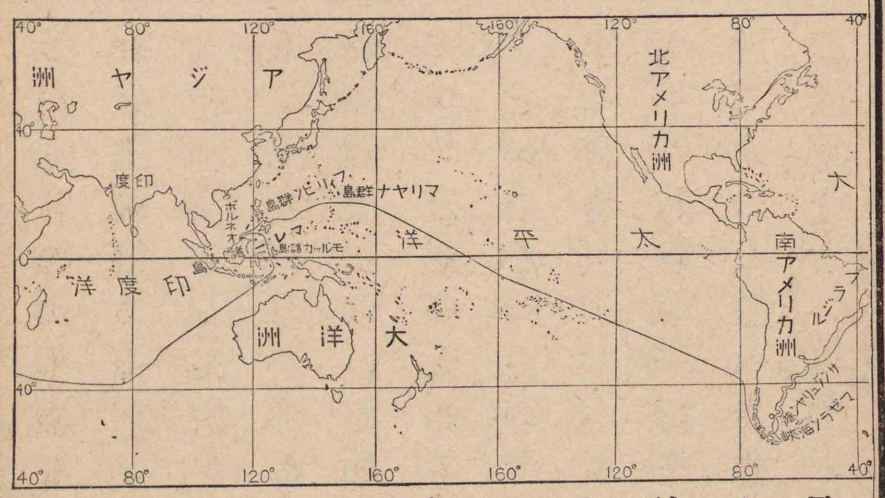
總べての用意を整へていよ〳〵大航海の途に上つたのは、コロンブスの新大陸發見後二十七年の千五百十

九年九月二十日であつた。一行はカナリヤ諸島を經、しばらくアフリカの西岸に沿うて南下し、それから方向を南西に轉じて、大西洋横斷にかゝつた。洋々たる希望に胸ををどらせながら、前途の幸福を祈つてゐたマゼランの前に、そろ〳〵不幸が頭を持上げて來た。當時航海に從事した船員には、一體に兇暴無賴の徒が多かつたが、殊に此の時は數國の人々を集めたために、やゝもすると互に反感をいだき、不和を生じ易かつた。船は皆百トン前後のものである。しかも大西洋には荒狂ふ風、逆卷く波があり、身を切るやうな寒さがあつた。是等の強敵と戰ふ乘組員は、疲れるにつれてけんくわは始める、不平はいふ、船内の秩序は日數の重るに隨つてだんだん亂れて來た。或船長の如きは、まのあたりマゼランを非難するに至つた。マゼランは見せしめのため、斷乎として其の不都合を責めて、船室に幽閉した。此の勢に恐れてか、不平の徒は聲をひそめて、大事には至らなかつた。

一行は風波と戰ひつゝも遂に大西洋を乘切つて、ブラジルの東岸に着いた。それから南下して、翌年三月にサン、ジュリヤン港にはいつたが、ちやうど南半球の冬が近づいたから、其處で冬を過すことにした。此の港の附近は荒涼たる不毛の地であつたから、食料を得る便宜が

なかつた。そこでマゼランは乘組員の日々の食物に制限を加へた。これがために積り積つた部下の不平は遂に爆發した。

各船内には不穩の氣がみなぎつて、マゼランの身に危險が迫つた。若し此の上航海を續けたら、部下のために殺されるかも知れない。しかし剛毅なマゼランは、これくらゐのことで意志をまげる人ではなかつた。彼は各船長と協議して、事を穩便にをさめようとしたが、かへつて三人までも彼に對して反旗をひるがへした。マゼランは尋常の手段では事がをさまらないと



見て、二船長を死刑に處し、一船長を陸上に追放して、秩序の回復を計り、同年八月再び出發した。

南へ〳〵と進む中、十月二十一日はからずも一の海峽にはいつた。白雪をいただいた山々を兩岸に望みながら進むこと三十八日、海峽は急に開けて、前面に見渡す限りはてしなき大洋が現れた。途中一隻の船は難破し、一隻は謀反を起して本國へ引返したが、マゼラ

ンはそれ等の不幸も打忘れて、飛立つばかりに喜んだ。此の海峽はマゼランの名譽を永く傳へるために、後の人がマゼラン海峽と名づけた。

永く風波に苦しめられた後、一度海峽を出ると、波は靜かに、風は和らいで、如何にも平和の氣に滿ちてゐた。マゼランは此の大洋を横斷する間波風に苦しめられることがなかつたので、平和な海といふ意味で、太平洋と名づけた。

太平洋航行中一行を非常に苦しめたものは、食料の缺乏であつた。貯へた食料はだん〳〵へる、進んでも〳〵陸は見えない。甲板の一部を張つた牛の皮、船倉のねずみ、食へさうなものは何でも食ふといふ悲慘な有樣で、弱り果ててたふれる者が多かつた。

全く陸を見ないこと九十八日、千五百二十一年三月六日、一行はやうやく一群島を發見した。其處に碇泊(ていはく)してゐる中、土人にボートや船具を盜まれたので、マゼランは此處をどろぼう群島と名づけた。これが今我が國の委任統治に歸してゐるマリヤナ群島である。

それから尙も西航して、程なく今のフィリピン群島に着いた。此處では食料も十分に得られたので、疲れきつた一行は、久しぶりにゆつくり保養することが出來た。

マゼランはフィリピン群島の征服に取りかゝつたが、餘

りに功を急ぎ、自分の力を頼み過ぎた爲に、多くの部下を失ひ、自分も遂に土人の爲に殺された。それは千五百二十一年の四月二十七日のことであつた。

一行はボルネオを經て、かねてマゼランが目ざしてゐたモルッカ諸島に出た。使用にたへる船は唯一隻となつたので、殘つた乘組員をこれに集め、セバスチヤン、デル、カノーが指揮して本國へ向つた。印度洋を横ぎり、喜望峯を廻つて、長い〳〵航海を續ける間にも、病氣でたふれる者が少くなかつた。斯うして千五百二十二年九月六日、世界周航の最初の名譽を負うて故國に歸つたのは、僅か十八人に過ぎなかつた。地球の圓いといふこと

の證明せられたのも、此の航海の賜物である。

第十三課　眞の知己

一時の朋友を得ることは易く、眞の知己を得ることは難い。平素歡樂を共にする間は、肩を打ち手を執つて互に談笑するが、一旦利害相反すれば忽ち仇敵となるやうな者は、眞の知己ではない。眞の知己は死生の境に臨んでも、相信じて疑はないものでなければならぬ。

昔イタリヤのシシリー島に、ピチアスといふ男があつた。或罪によつて國王の前に引出されて、死刑を言渡されたピチアスは今生の思出に、老父母の顏が見たくてたまらない。死刑執行の日には必ず歸つて來るから、此

の世の名殘に、今一度父母に會はせてもらひたいと歎願に及んだ。王は一言の下にはねつけた。

ピチアスの無二の親友に、ダモンといふ若者があつた。王に向つて、

「私はピチアスの親友でございます。彼は決して二言致すやうな者ではございません。どうか特別の御仁愛を以て、彼の願をお聞入れ下さるやうお願ひ申します。其の代りに私を獄中に入れて、萬一期日に至つて彼が歸つて參りませんやうなことがございましたならば、私をおしおき下さいませ。」

と言つた。王は此の友情に感じて、其の願意を聞屆けて、

ダモンを獄屋に入れた。

約束の日限は迫つたが、ピチアスは歸らない。王は獄卒に命じて嚴しく獄門を固めて、ダモンの動靜に一層の注意を拂はせた。しかもダモンは平然として、少しも不安の色を示さない。彼は言つた。

「若し期日に至つてピチアスが歸らないとしても、決して彼の本心から出たのではない。何か不慮の故障が起つたのである。」

いよ〳〵約束の期日になつた。約束の時間が迫つた。けれどもピチアスは歸らない。影も形も見えない。ダモンも今は是までと、死ぬ覺悟をきめた。しかし彼の親友に

對する信用は更に變らない。彼は又言つた。

「今此處で殺されるのは、最も信愛する友人の爲である。少しもうらむことはない。」

獄卒はダモンを刑場に引出した。彼の一命は寸刻の間に迫つた。此の時早く彼の時遲く、ピチアスは息も、絶え絶えになつてかけこんで來た。彼は途中風波の爲に妨げられたのであつた。若し期日に後れるやうなことがあつては、一つには無二の親友を殺し、二つには二言を吐いた惡名を後の世に傳へると思へば、居ても立つてもゐられない氣がしたが、如何とも仕方がなかつた。船が陸に着くや否や、ひた走りに走つて刑場にかけつけて見れば、ダモンはまだ生きてゐたので、餘りのうれしさに目前の死も何も忘れて、手の舞ひ足のふむ所を知らなかつた。

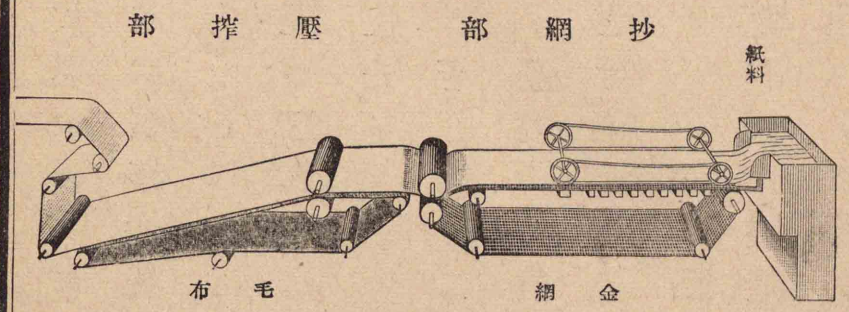
王は二人の信義と愛情に感激して、ピチアスの罪を許した。

「若し自分にもこんな親友を持つことが出來るなら、王者の富貴も榮華もいらない。」

とは、王の心の奥から出た歎聲であつた。

第十四課　西洋紙の製造

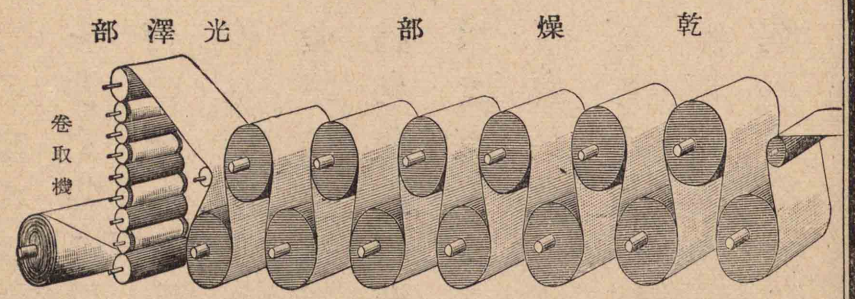
西洋紙を製造するには、藁・ぼろ・紙くづ等も原料として用ひられるが、主として使用されるのは木材である。現



抄紙機

今我が國では、えぞ松・とゞ松等の松材を用ひてゐる。

木材を材料として紙を造るには、先づ木材を機械にかけて、長さ一二寸ぐらゐの薄片にする。之を圓筒形の大きな釜に入れて、藥液を混じ、釜の中に蒸氣を通じて熱すると、木材の組織が破壞されて、纖維が分離する。そこで他の不要な部分を捨て、纖維だけを取出して他の機械にかけ、洗つたりさらしたりすると、白色のど



の圖

ろどろした糊のやうなものとなる。此の紙料を抄紙機にかければ、紙が出來るのである。

此の外に、木材を大きな砥石にかけて磨りつぶし、之に水を混じて其のまゝ抄紙機にかける方法もあるが、是は主として新聞の紙など粗惡なものを製造する方法である。

抄紙機は幅八九尺、長さ十數間にわたる大きな機械で、抄網部・壓搾部・乾燥部・光澤部の四部から成つてゐる。

其の中で抄網部は紙を抄く仕事をする所で、普通に紙を抄く時に用ひる竹の簀の代りに、眞鍮の細かい網が帶のやうに張られてゐる。此の金網は少しづつゆれながら、絶えず一方から一方へと動いて行く。紙料が此の金網の上に流れ出ると、水は網目から落ちて大體紙が出來、金網の進行に伴なつて壓搾部に送られる。壓搾部はまだべとくした抄きたての紙を毛布の上に受けて運びながら、ロールで壓搾し、更に水分を除去する所である。次の乾燥部には、蒸氣で熱せられた幾多の圓筒が横に並んでゐて、紙が其の圓筒の面に沿うて順次に進みゆく間に乾かされる。光澤部はロールの壓搾によつて、之に光澤を附ける所である。

斯うして金網の上に流れ出る糊のやうな紙料が、見る見る中に完全な紙となり、卷取機に卷かれてゆくその早さは、實に目を驚かすばかりで、一分間に抄出される紙の長さは、實に三百尺から七百尺に及ぶのである。現時我が國にある此の種の抄紙機は、百臺の上にものぼつてをる。これが夜となく晝となく働いて抄出す紙の量は、實に莫大なものである。

第十五課　海の朝

一

潮の音遠し、明行く海。

なほ夜の名殘にさ霧はこめて、
はひよる浦波砂を洗ふ。
船歌かすか、夢に似たり。

二

紫にほふ東の空。
横雲忽ち眞紅に燃えて、
見る〳〵太陽波を離る。
神代のまゝの光たふと。

三

金龍(きんりゅう)をどり、きらめく沖。
早くも島々夢よりさめて、

群立つかもめは風に白し。
命は溢る、海の朝。

第十六課　征衣上途

動員令のあつた其の日から殆ど一箇月、卽ち明治三十七年五月二十一日、これぞ一生忘れることの出來ないうれしい日であつた。

いよ〳〵戰地へ行かれることになつてみると、半時も早く出發したいと、誰一人思はない者はなかつた。さて其の待ちに待つた出發の日は決定されて、午前六時城內練兵場に整列せよとの命令が下つた。

日頃の熱望こゝに達して、男兒の本懷之に過ぎるもの

はない。我等の歡喜は無限であつたが、此の歡喜と共に、又暗涙の浮かぶのを禁じ得なかつた。「丈夫涙無きにあらず、離別の間にそゝがず。」とか。無論今更家を顧み親を慕ふのではないが、生きて再び歸らぬ決心があればある程、これが親子・兄弟今生の見をさめかと、鬼の目にも涙のたとへは免れ得なかつた。

出發の前夜、舊友の寫眞を出して見たり、机の中を片付けたり、死んだ後で留守の者に何一つわからぬ事の無いやうに、それ〴〵整頓してから、疊の上での最後の眠を求めようと寢床に就いた。

しばしまどろむと思ふ間もなく、柱時計は午前三時を

報じた。すはとはね起き、冷水で身を清め、晴の征衣を着飾つて、宣戰の大詔を奉讀し、はるかに大君います東の空を伏拜んだ。次に之を最後と、祖先の靈前に禮拜したが、此の時は、「汝は汝にして汝にあらず。陛下の御爲進んで難に赴け。未練なるふるまひして家名をけがすな。」と戒められるやうな感じがした。さて家族一同自分を圍んで別杯を擧げて、皆此のめでたい出陣を祝つてくれた。

「後の事は少しも心配するに及ばぬ。思ふ存分に働け。あつぱれな功名をして、家門の花を咲かせてくれ。」「私の事は決して御心配下さるな。武士の譽としてこんなうれ

しい事はございませぬ。せつかくお體を大切に。」とは、たゞに自分の家のみでなく、今日出征する人の殆ど總べての家々で、親子の繰返した悲壯の語であつたであらう。時は迫つた。自分は神前に供へておいた軍刀を腰に着け、勇みに勇んで我が家の門を後にした。

午前六時、聯隊は整列を終へ、軍旗は莊重な「あしびき」の曲の吹奏に迎へられて、朝風にひるがへつてゐる。聯隊長は沈痛な音調を以て、故國を去るに臨んでの最後の訓示を朗讀した。終ると其の發聲で、一同大元帥陛下の萬歲を三唱した。

「第一大隊より前進」。これ進軍に臨んで聯隊長が部下に下した最初の號令であつた。我等は既に征途に上つたのである。一同血湧き肉をどるの思があつた。向ふ處は天も裂くべし、地も碎くべし。

長蛇の如き我が聯隊は、誠心誠意よりほどばしり出でたる國民の萬歲の聲に送られて、勇ましく前進した。次第に遠ざかる靴の音蹄の響は、如何ばかり國民の耳に賴もしく聞えたことであらう。遠く近く響き渡るラッパの音は、卽ち親愛なる同胞に對する暇乞であつた。老も若きも手に〳〵國旗を振りかざし、天地もとゞろくばかりに叫ぶ萬歲の聲を聞いては、我等は誓つて此の至

誠に報いなければならぬとの感慨を深くした。其の後度々の戰鬪に、喊聲を揚げて敵壘に突擊する毎に、背後で國民の萬歲の聲が潮の如くに湧起るやうに感じた。我等の喊聲は國民の萬歲の聲の反響に外ならぬのである。巨彈耳をかすめる戰場の朝にも、嚴寒骨をさす露營の夕にも、決して忘れることの出來なかつたのは、國民が熱血をしぼつて叫んだ萬歲の聲であつた。

（櫻井忠溫「肉彈」ニ據ル）

第十七課　賴山陽

史家としても詩人としても有名なる賴山陽は、幼時より勤勉刻苦せる人なりき。八九歲の頃軍記を讀みて大いに之を喜び、爲に寢食を廢するに至れり。十三歲の時一詩を賦して其の志を述べ、如何にしてか千歲靑史に列する人たるを得んといへり。長ずるに及びて益〻文章を勵み、史學を修め、子弟を敎授する傍ら、常に著述を事とせり。每朝起床するや、必ず自ら寢具を收め、座敷を掃除し、かつて之を人に委ねず。終日讀書執筆して、夜は曉に至らざれば寢に就かず。有名なる日本外史は、二十五歲の頃既に其の稿略成れりといふ。又彼の日本政記は晩年の作にして、醫藥に親しみたる後も一日も筆を捨てず、眼鏡をかけ、其の稿本を手にして逝けり。時に年五十三。山陽かつていへらく、「我を才子なりといふものは、

我を知らざるものなり。よく刻苦すといふものは、眞に我を知るものなり」と。

凡そ如何に才氣ある人にても、勤勉刻苦の勞を積まざれば、一世の事業を成し難し。況や才氣の乏しきものに於てをや。山陽の才氣既に非凡にして、勤勉亦衆に超えたり。これ其の千古の名を成して、古人と共に青史に列したる所以なり。

山陽の景慕すべきは、其の學問・事業の上のみにあらずして、又其の德行の人たるにあり。山陽かつて門弟の爲に莊子といふ書を講ぜしが、たまゝ父危篤の報に接し、講を半ばにして急ぎ鄉里に歸れり。歸れば父既に逝けり。山陽悲歎やむ能はず、これより再び莊子を講ぜざりきといふ。父の死後は母に仕へて奉養特に厚く、しばしば母を奉じ、嵐山・吉野等に遊びて觀花の宴を催し、其の心を喜ばしむるを以て無上の樂しみとせり。

山陽また忠君の念に厚く、かつて病中にありて、談楠公の事に及び、慷慨激越殆ど病を忘れたるものの如くなりき。山陽が一生の著述・詩文は、皆其の忠君の精神に成れるものなり。其の著述の世道に益あり、人心を感奮せしめしこと幾何なるを知らず。

第十八課　象狩

印度のセーロン島で土人が象狩をする方法は、頗るお

もしろい。先づ象の居る森林を選び、其の近處の立木を其のまゝ柱にして、大きな柵を造る。最も大きな柵になると、周圍數マイルにわたることもある。其の一處には狹い入口をあけて置く。柵が出來上ると、大勢の土人がてんでにたいまつを振りながら、象の群を遠卷にして、だん〳〵と柵の方へ狩りたてる。象の群はたいまつの光を見て、驚いて逃出す。さうしてだん〳〵柵に近づいて來ると、竿や槍を持つてゐる土人が、一せいに喊聲を揚げて、竿でそこらあたりをたゝいたり、槍を振つたりする。象の群は益〻驚きうろたへて、何處かに逃口は無いかと探し廻る。そこへ幸ひ柵の間に一處すき間があるので、象の群は好い逃口だと思つて、恐しい勢で皆其の中にかけ込む。ところが逃口と思つたのは、土人がかねてあけて置いた柵の入口である。象の群がすつかりかけ込むと、土人は其の入口を閉ぢる。象はまんまと土人の計略に乘つたのである。

これから土人は、此の柵に閉ぢこめた象を一匹づつ外へ誘ひ出すのであるが、それには四五匹の馴れた象をとりに使ふ。其の象は土人がかつて之と同じ方法で捕らへて、よく飼馴したものである。

さて馴れた象が柵の中の象を一匹誘ひ出すと、土人は直に入口を閉ぢる。誘ひ出された象は逃げようと思つ

てあばれ出す。それを馴れた象が四方から取卷いて、長い鼻で其の象の體を輕くたゝいて、いろ〳〵となぐさめる。それで其の象はだん〳〵靜かになつて、優しい親切らしい同族と一しよに歩くやうになる。土人は其の後をつけて行つて、大きな木の下まで行くと、不意に丈夫な繩を象の足に投げかけて、木にくゝり附けてしまふ。馴れた象はまた柵の中に居る他の象を誘ひに行く。くゝられた象は之を見て、後を慕つてしきりにあせる。けれども行くことが出來ないので、大聲にうなつて、大きな木も根こぎにされるかと思ふ程にあばれ廻る。其の時土人は、象の好きな椰子や木の葉などを持つて來て食はさうとする。象は初の中は、それをはね飛ばしたり、ふみにじつたりして、なか〳〵食はうとしないが、腹のへつて來るのにたまりかねて、そこらに散らばつてゐる物を一つ食ひ二つ食ひ、遂には土人が皿に盛つて來る物までも喜んで食ふやうになる。

斯うして四五日もたつ中には、象はだん〳〵おとなしくなつて、飼主の命令に從つて、いろ〳〵の仕事をするやうになり、後には又をとりの役をも務めるやうになる。

第十九課　南洋の珍果

午前の中に日本領事館をおとづれて、何かと用事を濟

ました。

ホテルの晝食にはまだ大分間がある。此のひまに少しバタビヤの町を見物して、歸路南洋の珍果マンゴスチーンを買ひたいと言へば、案内者のジョンは委細承知と馭者臺に飛上つた。

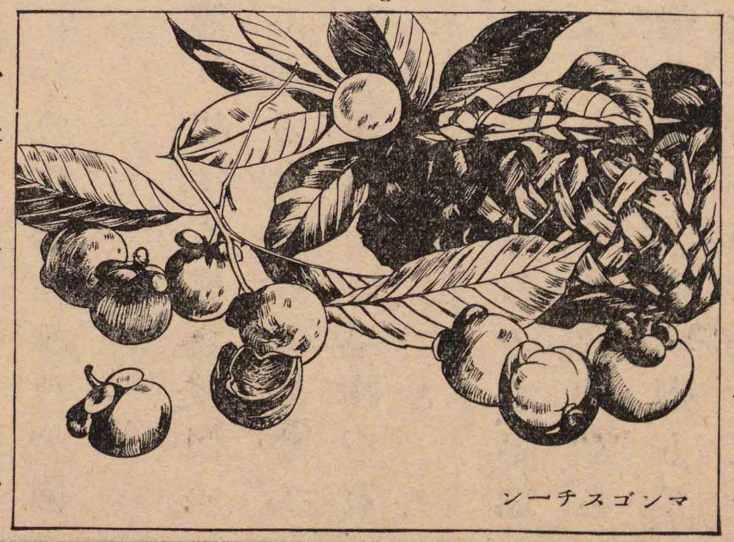
馬車は快く南國の陽光の下を走る。さすがにジャワは美しい處だ。綠濃き熱帶植物の木立の間に、白壁の洋館が涼しげに見える。

コーニングス、プレーンといふ廣々とした芝原を一周し、木立物古りたるウィルレム小路を拔けると、眼界は再び開けて、ウォーターロー、プレーンといふ公園に出る。中央には高さ五六丈もあらうと見える白色の圓柱の上に、大きな獅子像が立つてゐる。ジャワの政廳は此の公園の東にある。

馬車は北に走つて、支那人町を通り拔け、古風な城門のほとりに着く。此處が果物市場である。ジョンが馬車から飛下りて、いろ〳〵商人と交渉して、幾籠かの果物を買集める。自分も側からあれもこれもと手を出す。

ホテルへ歸ると、食事にはまだ三十分程あるので、早速マンゴスチーンの征伐にかゝつた。大きさは蜜柑ぐらゐ。黑みがちの紫色をした厚い殼を、ナイフで切廻して、すぽつと二つに開くと、純白な美しい肉が現れる。之を

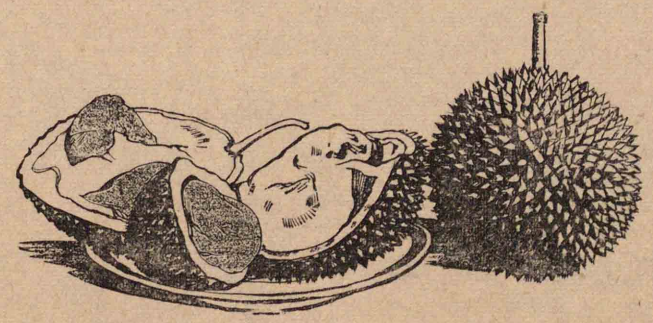
フォークの先でそつと引上げると、蜜柑のふさのやうに抱合つた六個の白肉が、其のまゝそつくり出て來る。之を舌に載せると、あたかも春の淡雪のやうにすぐ解け去つて、唯芳香のみが殘るやうに感じられる。味は林檎に似てしかも非常に甘く、舌ざはりはさながらアイスクリームのやうである。思ふにマンゴスチーンは、造化が其の巧を凝らして、萬果の粹を此の一果に集めたものであらう。しかし此の實は、枝を離れて一週間たゝぬ間に、早くも白肉が褐色に變じて、くづれてしまふ。かつて英國の汽船會社が、船長等に賞を懸けて、一籠のマンゴスチーンをビクトリヤ女帝の食膳に奉らうとしたが、遂に誰一人成功しなかつたといふ。近頃冷藏庫に入れて遠地に送るが、やはり香味を失つてしまふ。罐詰にしては、到底香味の萬分の一をも保たないといふことである。


マンゴスチーン

晝食後部屋に歸つてしばらく休んでゐると、何とも言はれぬ惡臭が鼻をついて來る。何だらうと考へて見てもわからない。すると廊下の方で、かちりとナイフの音

がする。戸をあけて見ると、ジョンがドリヤンの實を割つてゐる。少し離れて、土人のボーイがほしさうな顔をして立つてゐる。

マンゴスチーンを果物の女王とすれば、ドリヤンは果物の惡魔である。腐つた卵のやうな惡臭、とげのあるにく〳〵しい外皮、それでゐて其の特殊な味は、食ひなれた人を非常に誘惑する。大きさは子供の頭ぐらゐ、暗黄色を帶びた外皮は木の皮のやうに堅く、之に太いとげが密生してゐる。高さ數十尺の



ドリヤン

樹上に生じ、往々通行人に落ちかゝつて大けがをさせることがある。しかも木からもぎ取つては未熟であり、落ちてゐるのを拾つては腐敗のおそれがあるから、土人は終日終夜樹下に居て、實の落ちて來るのを待つてゐるといふ話である。

今ジョンが割つたドリヤンの實を見ると、其の中に不規則な幾つものかたまりがあつて、其の一つ〳〵がどろどろとして黄色いクリームのやうである。其の濃厚な味は、マンゴスチーンの淡泊上品と全く正反對であるが、食ひなれると、其の惡臭などは少しも氣にならぬのみか、かへつてマンゴスチーン以上に好むやうになる

といふ。ドリヤンの出盛頃になると、土人は之をむさぼり食はんがため、往々家業を捨てて顧みないといふことである。（鶴見祐輔「南洋遊記」ニ據ル）

第二十課　綱引

ヨーロッパからの歸り途、船中退屈の餘りに、或日綱引をしようといふ話が出た。日本郵船會社の船で外國人の乘客が少かつたから、組を作るのに、一方は日本人、一方は外國人ときめた。もつとも外國人といつても、過半は英國人である。僕は少し氣分が惡かつたため御免かうむつて、やじうま兼行司の役目を勤めた。

いよ〳〵始める前に、兩方十五人づつと數はきまつたが、何分外國人は體も大きいし、目方もずつと重いから、到底勝負にはなるまいと懸念したが、勝敗は何れにしても、たゞ運動が目的だから、やかましいことはいはずに、雙方同數で開戰した。すると外國人の方では、日本人は體が小さいから、一しやうけんめいになるに及ばないと思つて、少しばかにした氣味があつたか、第一回の勝利は日本人に歸した。無論我々は大いに得意になつて、聲を張上げて萬歳を叫んだ。次に二回目の勝負を始めると、今度は外國人も油斷しないで引張つたと見えて、勝利は彼等のものとなつた。第三回はいよ〳〵決戰である。日本人は大和民族の榮辱此處にありと、力の有

らん限り引張ると、外國人も遊戯とはいへ勝負事だから、大奮發して引張つた。僕は其の間に立つて氣が氣でなく、東に走り西にはせて、兩方の形勢をうかゞつてをつたところが、あら嬉しや、勝利は遂に我が同胞に歸した。喜の餘り我々は飛上るやら手をたゝくやらして、滿足の意を表した。相手方は一時茫然として、どうしてあんな小さい日本人に負けたらうといふやうな顔をして考へてをつたが、其の中に一人が發議して、「日本人は小さいが強い。大いに敬意を表さう。」といふと、皆の者がさうだ〳〵と拍手喝采して、敵方の勝利をほめたゝへた。之を見之を聞いた僕は、同胞の勝利をさも自慢げにをどりはねて喜んだのが、今更恥づかしくなつた。（新渡戸稲造「歸雁の蘆」ニ據ル）

第二十一課　廣瀨武夫の手紙

毎度御懇書拜受再三精讀仕居候先づ以て姉上様にも馨ちやんにも相變らず御壯健大賀の外これなく候降つて武夫儀例の通り壯健日夜軍務に從事致居候間はゞかりながら御休神なし下さるべく候毎回の御手紙實に御友愛の情溢るゝばかりにて誠に感激に堪へず候御惠贈の書籍吳羊羹耳袋並に靴足袋確に拜受御厚情に報いん言葉もこれなく候

先日大島艦入港し即夜兄上御來訪出征後始めての兄弟の面會とて覺えず嬉し涙に暮れ申候兄上には昨今頗る御壯健にてもはや御病後の御様子などは更にこれなく候間御安心遊ばさるべく候

報國丸にての働につきては兄上にも非常に御喜びなされ早速御手紙を以て武勇絶倫先考に代り之を激賞すとの御言葉をいたゞき武夫の滿足も之に過ぎず候安井様よりも御手紙をいたゞき申候又新聞紙上には有ること無きこと書立て鬼などのあだ名を附し候

もをかしく又報國丸にて働きし眞相などとて武夫より親しく聞きしやうに書き候ものもこれ有り候へども實は誤多く迷惑に感じ候點もこれあり候

負傷者に御見舞として餅との御意見はさることながら彼等には燒くなどの自由これなく候間御見合はせ下されたく若し思召もこれあり候はば武夫姉として御見舞狀を御出し下され候はば幸甚の至に候

武夫儀はいよ〳〵相勵み軍功を立て申すべく「七度人間に生まれて國賊を滅さん」とは一

貫の精神にこれあり決して先度ぐらゐの働にて滿足致す者にこれなく候元來天佑を確信し居ることに候へば決して〳〵無用の御心配下さるまじく候再拜

三月二十日　武夫

姉上様

運送船の便よろしく何の不自由をも感じ申さず候間種々の御心づかひは御無用に遊ばされたく候時下御自愛を祈上候

第二十二課　漁船歸る

燒けつくやうな夕日は、さへぎるものもない白い砂を眞赤に染めてゐる。風のないだ海の波は、小山のやうに寄せて來ては、だぶりとけだるい音に崩れると、ざ、ざ、ざ、ざと布を敷いたやうに廣がる。と、其の波先がきら〳〵と日に輝いては、すぐさつと引いて行く。

「船がはいるよう。」

人影一つない廣い濱の何處からか、急にかん高い子供の聲が起る。

「おうい。」

「今行くよう。」

あつちでもこつちでも聲に應じて、其處の松の間、此處

の岩の陰から、男・女・年寄・子供、漁村の人の群がぞろ〳〵と出て來る。今まで眠つたやうに靜かであつた濱は、急ににぎやかになり、活動が始つて來る。高い砂山の上に立つて小手をかざしながら沖を見てゐた一人が、

「眞先が明神下の船だ。」

と大きな聲で叫ぶと、

「うん、うちの船か。」

と、其の家族らしい四五人が勢よく砂山にかけ上る。朱を流したやうに夕燒に染まつた沖の方からは、黑い帆影がぽつつり小さく、一つ二つと歸つて來る。

「あゝ、また見えた。今度は太兵衞どんのうちのだ。」

と誰かがまた叫ぶ。

湧く〳〵。沖の波の間から、小さい船が一つ又一つ、後から後から視界にはいつて來る。濱に立つてゐる人々は、皆言合はせたやうに我が家の船を見守る。子供たちはもうはしやぎきつて、緩く打ちつける波先を追つては逃げ、逃げてはまた追ふ。

船は幾艘も續いて、ないだ海に夕日を受けた帆が美しく並ぶ。かもめが三四羽、其の先導をするやうに低く飛んで岸近く來ると、一せいに水の上に翼を休める。

「大れふだぞ。あの帆柱を見ろ。」

群集の中の誰かが叫ぶ。次第に近寄つて來る船の帆綱

には、幾つもの編笠が飾のやうにつるされてゐる。一つ百尾の目安として、どの船にも五つ六つ無いのはない。

櫓を漕ぐ掛聲がかすかに波を渡つて來る。

濱には益、人數が增して、右往左往に入亂れる。籠を持つてゐるもの、棒をかついでゐるもの、飛廻る子供、それを追ふ犬、嬉しさに張切つた空氣があたりにみなぎる。

やつさ、ほいさ、やつさ、ほいさ、十挺櫓の勇ましい掛聲は次第に近づいて、高波を乘越え〳〵、見る間に一艘二艘と寄つて來る。岸から三四十間の處まで來たと思ふと、ぐるりと船が廻る。仁王のやうにたくましい姿が艫に現れて、

「綱を投げるぞ。」

と大きな聲で叫ぶ。聲と共に太い綱が勢よく陸の方へ投げられる。船からも陸からも、若い男たちが赤銅のやうな體を海中にをどらせて、水に漂うてゐる綱を陸にかつぎ上げる。えつさ、えつさ、えつさ、えつさ、船を押す、綱を引く、拍子を合はせて一直線に陸に向ふ。船は舳先を波にゆられながら、高い艫を小山のやうに陸に向けてすわる。

船からは勇ましい掛聲と共に、次から次と獲物が運ばれて、白い砂の上に投出される。瑠璃のやうにすんだ目、紫を含んだ青色の背、勢よく張つた尾・鰭、見る〳〵鰹の

山が築かれる。此の時、此の華やかな夕日の下に、多大の勞苦に報いられた海幸を圍んで起る喜の聲は、波を渡り山にこだまして、遠く〳〵何處までも響いて行く。

第二十三課　かぶと蟲

まだ小學校に通つてゐた頃、昆蟲を集めることが友達仲間ではやつた。自分も古蚊帳のきれで蟲捕網を作つて、土用の日盛にも恐れず、毎日のやうに蟲捕に出かけた。蝶や蛾や甲蟲類のたくさんすんでゐる城山の中をあちこちと歩いて、永い日を暮した。二の丸、三の丸の草原には、珍しい蝶やばつたが多い。少し茂みにはいると、木の幹に玉蟲・こがね蟲・米つき蟲などさま〴〵の甲蟲

が居る。草木の強い香にむせながら、胸ををどらせてこんな蟲をねらつて歩いた。捕つて來た蟲は熱湯や樟腦で殺して、菓子折の標本箱にきれいに並べる。さうして此の箱の數の增すのが樂しみであつた。

蟲捕から歸つて來ると、體は汗で水を浴びたやう、顏は火のやうであつた。どうしてあんなに蟲好きであつたらうと、母は今でも昔話の一つにしてゐる。年をとるにつけておもしろい事にもいろ〳〵出會つたが、あの頃珍しい蟲を見つけて捕らへた時のやうな喜は餘りない。今でも、城山の奥の茂みの中に漂つてゐた朽木の香を思ひ出すことがある。

何時か城山の裾の、お堀に臨んだ暗い茂みにはいつたら、大きな木があつて、桃色がかつた花がこずゑを一面におほつてゐた。散つた花は風に吹かれて、みぎはに半ば沈んでゐる船に美しくちらばつてゐた。此の木の幹には處々蟲の食入つた穴があつて、穴の口には細かい木くづが蟲の糞と共にこぼれかゝつて、一種の臭氣を放つてゐた。見ると幹の高い處に、見事なかぶと蟲が、いかめしい角を立ててとまつてゐる。自分の標本箱にはまだかぶと蟲のよいのが一つも無かつたので、嬉しさに胸をとゞろかしながらねらひ寄つた。少し網が屆きかねたが、やう〳〵のことで捕れたので、急いで腰の蟲

籠に入れ、包みきれぬ喜をいだいて森を出た。

三の丸の石段の下まで來ると、向ふから美しいかうもりがさをさした女の人が、子供の手を引いて、木陰傳ひに來るのに會つた。かさを持つた手に藥瓶をさげ、片手は子供の手を引いてゐる。子供は大きな新しい麥藁帽子のひもをかはゆいあごに掛けて、眞白な洋服のやうなものを着てゐた。自分のさげてゐた蟲籠を見つけると、母親の手を離れてのぞきに來たが、目を圓くして母親の方へかけて行つて、袖をぐい〳〵ひつぱつてゐると思ふと、又蟲籠をのぞきに來た。母親は早くおいでと呼ぶけれども、なか〳〵自分の側を離れない。强ひて連

れて行かうとすると、道の眞中にしやがんでしまつて、とう〳〵泣出した。母親は途方にくれて叱つてゐる。此の樣子を見てゐた自分は、俄に蟲籠のふたをあけてかぶと蟲を引出し、道端の相撲取草を一本拔いて、蟲の角をしつかりしばつた。さうして、さあといつて子供に渡した。子供は直に泣止んで、きまりの惡いやうな嬉しいやうな顏をする。母親は驚いて子供を叱りながらも禮を言つた。自分はだまつて空になつた蟲籠を打振りながらかけ出したが、嬉しいやうな、惜しいやうな、かつて感じたことのない心持がした。

其の後度々同じ木の下へも行つたが、あの時のやうな見事なかぶと蟲はもう見つからなかつた。又あの時の親子にも再び會はなかつた。（寺田寅彦「藪柑子集」ニ據ル）

第二十四課　スパルタ武士

昔ギリシヤにスパルタといふ國ありき。國民愛國の精神燃ゆるが如く、武勇の譽今尙高し。而してスパルタ人の教育の方法と生活の狀態とを聞くものは、此の聲譽の偶然にあらざるを知るべし。

スパルタ人は悉く武士にして、男子生まれて七歲に達すれば、國立の教育所に收容せられ、王子・王族といへども家庭に人と成るを許されず。其の教育は身體の錬磨と士氣の養成とを主とし、日常の學課は體操・武術・劍舞・

軍樂等にして、讀み書きの如きは餘力を以て之を學ぶに過ぎず。

教育所に於ける少年・青年の生活は、專ら廉潔・質素・克己・忍耐の氣象を鍛錬するを目的とし、其の規律は頗る嚴格なるものなりき。寢ぬる時は、僅かに一枚の敷蒲團を用ふるのみ。其の蒲團は河邊の蒲の穗を集めて、自ら之を作らざるべからず。衣服は重ね着を許さず。冬も尙はだしにて、靴をうがつを得ず。每日河水に浴して、溫湯を用ふることなく、食物も亦極めて粗惡にして、しかも飽食することを許されず。是他日戰場に出でて、飢渴に耐ふるの習性を養はんがためなり。

言語は簡明を貴び、饒舌を戒む。故に今日に於ても、西洋諸國にては、言語の簡單明白なるを「スパルタ人の答」といへり。又謙讓と從順とはスパルタ武士の最も重んずる所にして、長幼の序正しく、未成年者は路を行くにも、兩手をマントの下に入れ、視線を地上に垂るゝを禮とし、揚々濶步するを得ず。公民は總べて未成年者を懲戒するの權利を有し、懲戒を受けたる未成年者、若し之を其の父兄に告ぐる時は、父兄は更に之を懲戒するの

義務あり。

二十歳に達すれば、始めて共同の教育所を出でて、公民の列に入る。しかも武藝の練習は終生之を怠るを得ず。公式・祭儀の席には、老若相合して武勇の歌をうたふ。老人先づ聲を上げて、「我等はかつて武勇なる壯者なりき。」とうたへば、壯年之に次ぎて、「我等こそ今はそれなれ。知らぬ者はいざ試みよ。」とうたふ。少年また之に和して、「我等はやがて更に武勇なる壯者たるべし。」と結ぶ。

斯くの如き尚武教育に鍛はれたるスパルタ武士は、死を見ること歸するが如く、瓦となりて全からんよりも、玉となりて碎けんことを希ひ、祖國の爲に一命を捨つ

るを以て無上の名譽とせり。

こゝにスパルタ武士の面目の一端を見るに足るべき二三の美談を記さん。

敵の軍勢山野に滿ち、大小の軍旗空をおほひて天日見えずとの報に接し、大將自若として曰く、「然らば其の陰に戰はん。」

敵勢雲霞の如く、其の數を知らずと言へば、一將喜んで曰く、「敵勢大なれば、我等の名譽も亦隨つて大なり。」一將又曰く、「我等は敵軍の數を知るの要なし。唯其の所在を知るべきのみ。」

敵軍將に寄せ來らんとすと報ずるものあり。將軍叱し

て曰く、「敵、我に寄するに非ず、我、敵に寄するなり。」

スパルタ人の忠勇義烈なるは、獨り男子のみに非ず、女子も亦此の美德を分てり。一婦人其の子の出陣に際し、自ら盾を取りて之に授けて曰く、「勝ちて持歸れ。然らずんば之に乘りて歸れ。」

或時の戰に、一時に五子を失ひたる母あり。人あり、來りて之を告ぐれば、先づ勝敗の如何を問ふ。我が軍勝てりと聞きて、喜んで曰く、「我が子は祖國の爲に之を産めり。」

又或時の戰に、討死したる勇士の母は、花冠を被りて街頭に集り、互に其の子の名譽を祝し、敵の包圍におちいりたる將卒の母は、固く戸を閉ぢて出でず、ひそかに其の子の武運つたなくして、祖國の爲に死する能はざるを悲しめり。

第二十五課　統計

一家に就きて見るときは、男女の數甚だしく異なるものあり。或は全く男子又は女子のみの家なきにあらず。然るに一村に就きて調査するときは、一家に於けるが如く男女の割合に甚だしき差異なし。なほ其の區域を廣むるときは、一郡は一村より、一縣は一郡より、差異次第に減少し、斯くて全國に就きて見れば、更に僅少となる。例へば大正九年十月一日施行せられたる第一回國勢調査の結果によれば、我が國内地の總人口は五千五

百九十六萬餘、中男子二千八百四萬、女子二千七百九十二萬にして、男子百人に對して女子九十九人六分に當る。

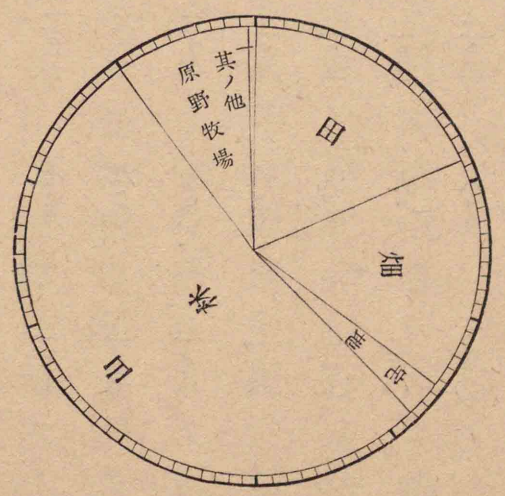
男女の割合斯くの如くなるは、此の時の調査のみに限らず、從來の人口統計に就きて見るも、常に相似たる結果を示し、其の割合は略、一定せり。又年々の出生・死亡・婚姻・自殺等も、大數に就きて觀察するときは、それ〴〵其の人口に對する割合は殆ど一定し、郵便物の配達不能の割合すら、年々相似たりといふ。されば社會の現象は一見甚だ不規則なるが如しといへども、大數に就きて之を觀察するときは、自ら整然たるものあり。

年次	人口百ニツキ出生	出生女百ニツキ男	出産百中死産	人口百ニツキ死亡	人口千ニツキ婚姻	人口一萬ニツキ自殺
大正四年	三・三	一〇四	七・三	二・〇	八・二	一・九
同　五年	三・三	一〇四	七・二	二・二	七・九	一・七
同　六年	三・二	一〇四	七・二	二・一	八・〇	一・七
同　七年	三・二	一〇四	七・四	二・七	九・〇	一・八
同　八年	三・二	一〇五	七・〇	二・三	八・五	一・八
同　九年	三・六	一〇五	六・六	二・五	九・八	一・九
同　十年	三・五	一〇五	六・五	二・三	九・一	二・〇
同十一年	三・四	一〇四	六・三	二・二	八・九	二・〇
同十二年	三・五	一〇四	六・一	二・三	八・八	二・〇
同十三年	三・四	一〇四	五・九	二・一	八・七	一・九

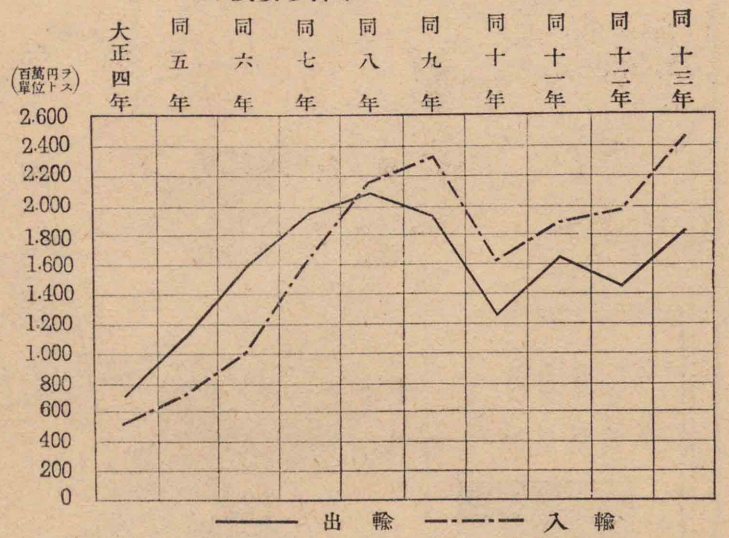
斯く同一種類に屬する事物又は現象の大數に就きて調査し、數字を以て表したるものを統計といふ。統計は場合によりては、見る者をして其の印象を深からしめんが爲、面積・線・色、或は形象等を用ひたる圖表を以て之を表すことあり。

統計によりて觀察するときは、社會各般の狀態を明らかにし、隨つて其の原因結果の關係をも審にするを得べし。卽ち犯罪・自殺等の統計によりては、其の國民の

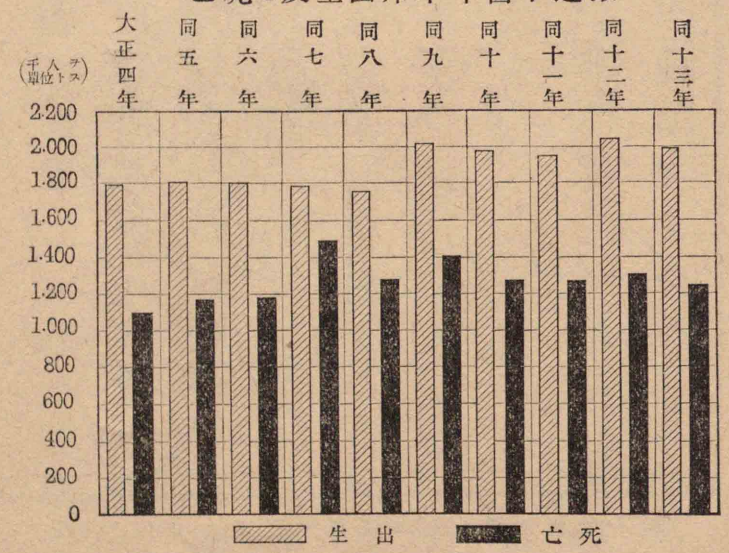
民有有租地地目別割合
大正十三年

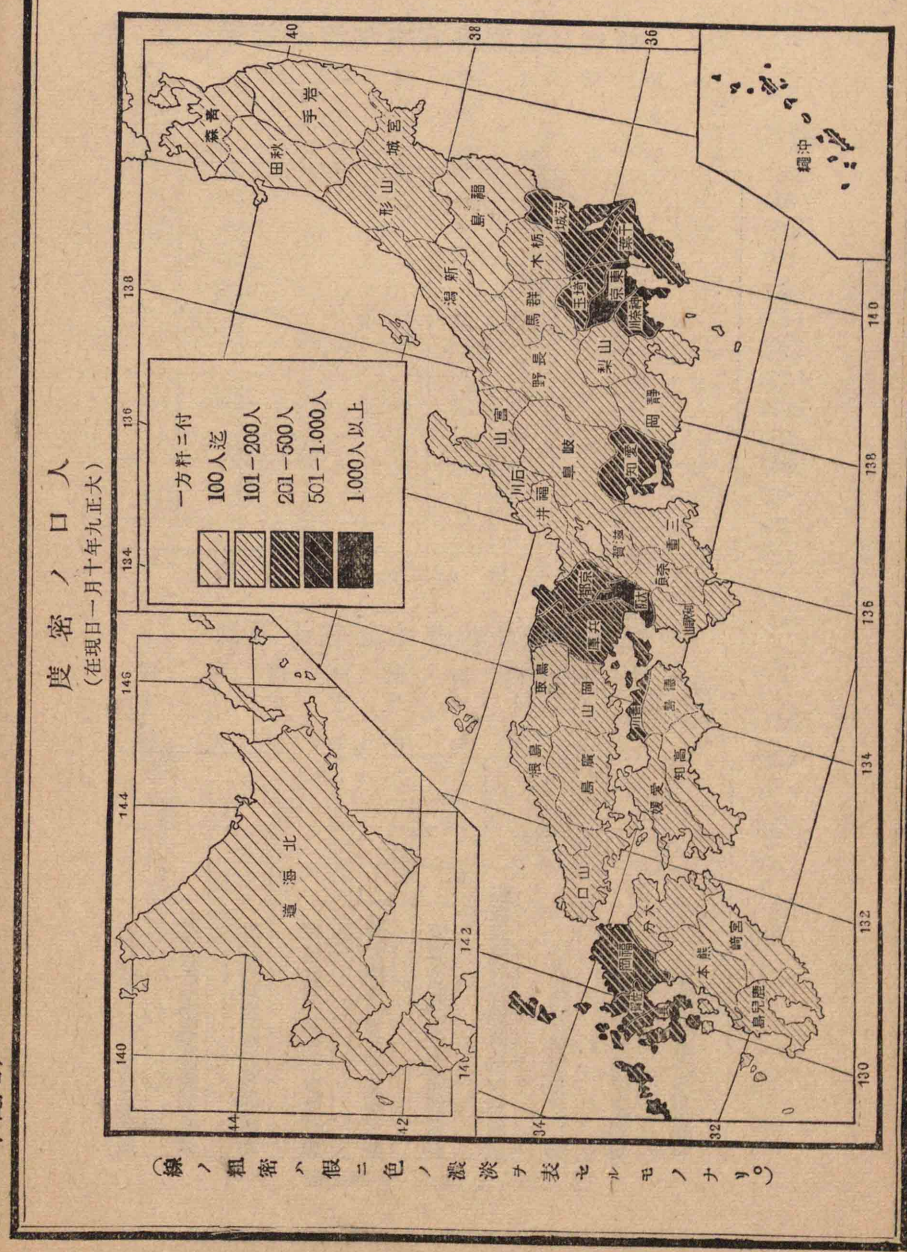


最近十箇年本邦外國貿易價額

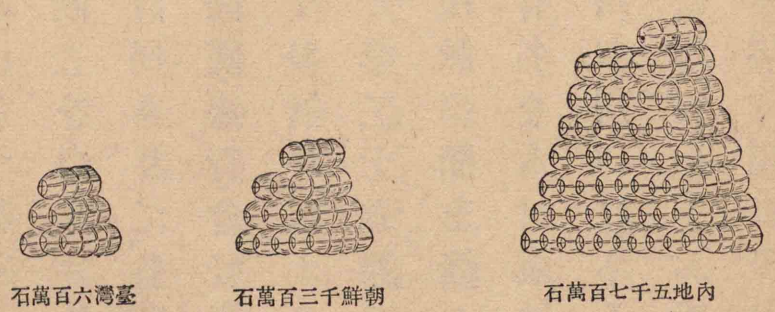


最近十箇年本邦出生及ビ死亡





大正十三年米收穫高



道德程度等を知るべく、農工の生產額、貿易の多寡(たくわ)によりては、其の國の經濟狀態等をうかゞふべく、又歲入・歲出及び軍事の統計を見ては、財政・國防の如何を察するを得べし。されば統計は、政治・經濟及び社會上の施設・經營には勿論、自然現象又は社會現象の學術的研究にも亦必要缺くべからざるものなり。これ文

明諸國に於て、特殊の機關を設け、多額の費用を投じて其の調査を怠らざる所以にして、我が國に於ても、内閣に統計局ありて、各種の重要なる統計を取り、各省・府縣・自治團體・銀行・會社等、亦それ〴〵其の必要なる事項に就きて統計を整ふることに務む。

第二十六課　筏流し

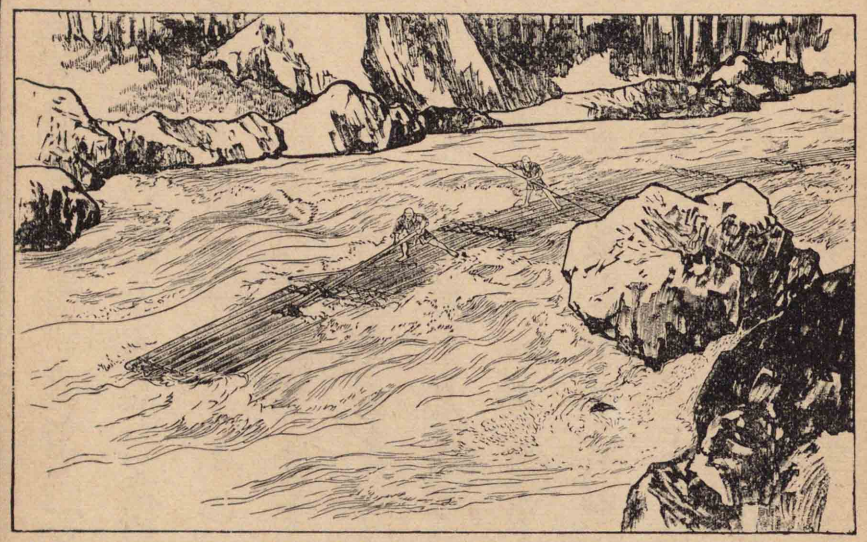
紀伊山脈の間を縫つて流れ下る十津川と北山川の沿岸は、有名な木材産地である。隨つて此の二川の合した熊野川の川口にある新宮の町には、りつぱな製材所もあれば、木材を運ぶ船もたくさんに着いてゐる。製材所の貯木場や川口の附近に行つて見ると、何萬とも數知れない木材が、果もなくぎつしりと水面に浮かんでをり、川上からは大きな筏が後から〳〵下つて來る。其の有樣は實に壯觀である。

斯うたくさんの木材が集つてゐるところだけを見ると、わけもなく此處まで運ばれたもののやうに思はれるが、何しろ二十里三十里の山奥で伐つて運んで來るのであるから、決して容易な業ではない。

先づ某の山で幾百本かの立木を伐倒す。さうして木の大きさや種類によつては、其のまゝ直に出すものもあるが、多くは五六箇月から一年ぐらゐも乾かして後、山出しにかゝる。

伐出した場所が谷近い處なら、其のまゝ押落すが、谷へ遠い處では、木材を數本縱に並べて、其の上を順次にすべらせて送り出す。

やつと谷へ木材を落しても、多くは木を流す程の水の無いのが常であるから、今度は此の谷をせき止めて、氣長に水をためる。其の中に水が次第に增して堰を溢れるやうになると、木材を一本々々流し落す。勿論行く手にも水が乏しければ、幾度でも之を繰返す。若し又全く谷に水が無いとなると、別の方法をとらねばならぬ。それにはたくさんの細い木を二尺おきぐらゐに横に並べて、其の上をそりのやうなものに載せて運ぶのである。

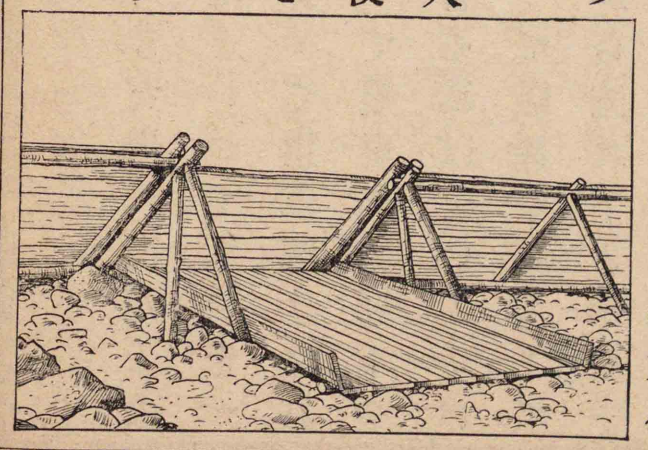


さてやゝ大きな川へ出たとなると、「管流し」といつて、木材を一本一本のまゝで川へ流す。これが流に隨つて幾里か流れ下つて「あば」に着く。あばといふのは、川を横切つて鐵線を張渡して置き、上流から流れ下る木材を受止める處で、此處で始めて筏に組む。

筏の組みやうは、先づ尺締（方一尺、長さ二

間の體積。四本を標準として一組とし、此の一組の木材を幾つもつないだものが一筏になる。いはば一筏は一列車、各組の木材は一輛々々の車に當るのである。筏には大小あるが、先づ八組又は十一組づつつなぐのが普通である。

一筏には通常二人乘つてゐる。一人は前の方で舵をとりながら櫂を使ひ、一人は後に居て竿を執つて筏を操る。若し水が少い時であると、川の途中に閘門のついた堰を作つてあるから、此の門を閉ぢて水をたゝへ



た後、さつと門を開くと、筏は、瀧のやうに流れ落ちる水につれて、矢よりも早く下つて行く。斯うしてだんゝゝ本流に出るに隨つて、水量は次第に多くなり、流は漸く緩くなる。筏師が此の間の變化極りない景色を縫つて下る樣は、如何にも愉快さうに見えるが、雨露にさらされ、水にひたり、日がな一日水を見つめて、ちよつとの油斷も出來ない身になつては、容易な苦勞ではない。有名な瀞八丁も九里峽も、全く其の眼中には入らないのである。

第二十七課　瀧澤馬琴の苦心

瀧澤馬琴は德川時代に於ける有名なる小說家にして、

其の著作二百六十餘種、雜著を合すれば、無慮三百數十種に及ぶ。それ等の中にても南總里見八犬傳の如きは、其の構想の大なる、其の分量の多き、我が國古來多く比を見ざる大作にして、卷數總べて百六卷、彼が四十八歳より七十五歳に至る二十八年間の努力の結晶なり。隨つて馬琴が此の八犬傳を完成するに就きては、涙こぼるゝばかりの苦心こそ傳へらるれ。

元來馬琴は非常の勉強家にして、壯年時代には、早朝より夜の十時に至るまで稿本を綴り、就寢後は更に讀書に夜を更して、時には曉に及ぶこともありき。此の過度の勉強の結果、何時しか健康を害して、八犬傳に筆を執

初めし頃は、既に齒拔落ち、逆上口痛のわづらひさへ起れりといふ。されど謹直にして義理を重んずること堅き彼は、一旦書肆と約せし稿本をなほざりにする時は、出版の時日後れて、利を失はしむること少からずとて、一方に攝生に注意しつゝも、なほ專心其の著述に勉めぬ。

とかくする中、馬琴が六十七歳の秋、右眼俄に明を失しぬ。彼は今更に過去の不注意を悔みつゝも、例の負けじ魂より、以後は左眼のみを賴みとして、なほも屈せず著作の筆を進めたり。然るに幾何もあらずして、また左眼も何となくかすむやうなりしかば、或は眼鏡の玉の惡

しき故にもやと、水晶製の價高きものをもいとはず買求めて試みしかど、眼疾は益、度を加ふるのみ。斯かる間にも、小說の稿は一日も廢することなく、七十四歲の春までは、ともかくも從來のまゝに一枚十一行の細字を書列ねゐたりしが、此の頃より更に病重りて、到底細書するを得ず。遂には五行とし四行としたれど、其の大字すらも手探りにて記せば、墨の續かぬところさへあるに至りぬ。馬琴が其の日記中に、「衰眼實にせんかたなし。」と歎じ、「衰眼かすみて見えかね、唯手加減のみなり。」といへるも此の頃にして、彼が心中の遺憾如何ばかりなりけん。されど秋より冬に入りては、其の探り書きすらも

かなはずなりて、さながら雲霧の中に在るが如く、わづかに東西を辨じ、晝夜を知るを得るのみ。

斯かる境遇に至れば、多くは失望落膽して、年來の事業をも廢するが常なれど、彼はなほも志を屈せず、如何にしても其の大作を完成して、一は讀者の期待にこたへ、一は書肆の利をも全うせしめんことを期したり。されど當時一子興繼は既に歿し、孫は幼くして斯かる助となるべくもあらず。唯嫁みち幸に多少の文字を解したれば、之をして口授を筆記せしむることとしたれど、當時の女子の學問といふは極めて淺きが常なれば、漢字・雅言はもとより、假名遣・句讀をも知らず。之を相手とし

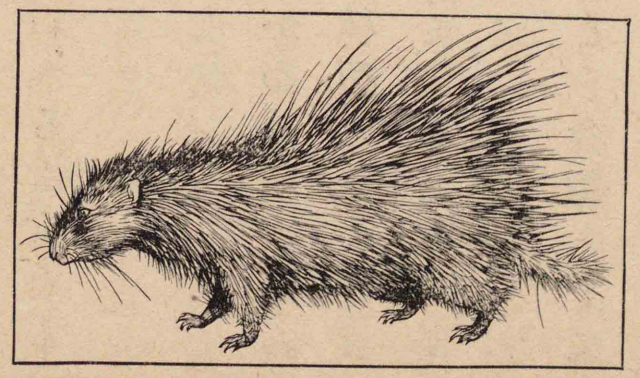
て、一字一句の末までも教へ導く馬琴の苦心は如何ばかりなりけん。教ふる者「くちをしの目や」と歎けば、まして教へらるゝ者は夢中をたどる心地して、困じ果てては唯泣くのみなりき。馬琴は其のいたはしさを見るにつけ、幾度か中止を思ひ立ちしかど、一卷二卷と進む程に、みちも漸くに馴れて、苦心初の如くならず、言を費せども舌の疲るゝまでには至らず。斯くして最後の十卷を綴り、馬琴七十五歳の秋八月、終に八犬傳はこゝに完成するに至りぬ。馬琴が不屈の精神の偉なるはもとよりなれども、みちがよく之を助けたる功も亦沒すべからず。馬琴が其の書の末に記せる文中に、「教を受くる者の困じながらも倦まで勉むるにあらざれば、此の十卷を綴り果して、局を結ぶに至らんや。」といへるも、宜なるかな。

第二十八課　やまあらし

世の中にはずゐぶんおもしろい動物がゐる。やまあらしなども其の一つであらう。此の獸は種類によつて多少の差があるが、大體身長二尺ぐらゐで、胴から尾にかけて長い鋭い針毛で包まれてゐる。

やまあらしは木の根や木の實や草などを食物として居る。常に穴の中にすんでゐるが、其の形の恐しいのに似ず、性質が誠におとなしく且臆病であるから、腹がす

いて食物を捜す時でも、容易に外に出ない。先づ穴の入口の處に身をひそめて、暫く外の様子をうかゞひ、何の危險もないことを確めてから始めて出る。又針毛といふ武器は持つてゐるが、自ら進んで他を攻撃することはない。唯他から攻撃されて自分の身が危くなると、それを逆立てて、まるで針のまりのやうになる。さうするとどんな猛獸でも攻撃することが出來ない。象などが近寄ると、すぐ針毛を立てて、死んだもののやうにじつと動かずにゐる。象は不思議な



物があると思つて、暫く立止つて見てゐるが、針毛があるのでどうすることも出來ずに、其のまゝ行つてしまふ。

それではやまあらしには敵が無いかといふと、全く無いことはない。それはアフリカにゐる或種類の強い蟻（あり）である。この蟻の群に會つては、どんな猛獸もかなはない。やまあらしが例の手段で、如何に針のまりのやうになつてころげ廻つても、蟻は平氣で全身にとりついて、忽ちの間に食殺してしまふ。又やまあらしの敵には熊がある。熊は極めて利口であるから、自分の身を傷つけずに相手を攻撃する方法を知つてゐる。先づやまあら

しを見ると、近寄つて石や土くれを打ちつける。すると
やまあらしは針毛を立てて、まりのやうに圓くなる。此
の時、熊はそつと側に寄つて、前脚の爪で幾度もくや
まあらしをころがして、木の根や幹に打ちつける。さう
するとやまあらしは次第に氣力が衰へて死んでしま
ふ。しかし又こんな滑稽な事もある。木の上に眠つてゐ
るやまあらしを捕らうとして、そつと登つてゆり動か
したり、相手の乘つてゐる枝を折つたりする。ところが
熊は木登は上手だが、木を下りることは案外下手であ
るから、熊が地上に下りつく前に、やまあらしはすばや
く他の木に登つて、平氣でまた眠つてしまふ。

やまあらしは北アメリカ・南部ヨーロッパ・北部アフリカ・
南洋諸島、支那の東南部等にゐる。英領カナダなどでは、
保護獸になつてゐて、みだりに之を捕る者は罰金に處
せられる。此の獸は斯ういふ風に、處によつては法律で
保護されてゐる上に、他の猛獸に攻擊される恐も少く、
又餌も到る處にあるから、勝手氣まゝに野山を歩いて、
腹がいつぱいになると、穴の中や木の上で靜かに眠る。
やまあらしは形に似ず、どこまでものんきなかはゆい
獸である。

第二十九課　足柄山

足柄山のよはの月、空すみ渡る笙の音に、

草木も耳をそばだてて、谷の眞清水響き合ふ。

新羅三郎義光は　更に祕曲を吹添へて、
取出したる一卷を　時秋が手に渡しつゝ、
「汝が父より傳はりし　祕曲は之にをさめたり。
今の調を耳にしめ、　都路さして歸れ、とく。」

さすが名殘の惜しまれて、時秋尙も「御後に
從ふべし。」とためらへど、義光頭をうち振りて、

「我戰場に向ふ身の　野末の露と消えん時、
汝にあらでは此の曲を　誰かは後に傳ふべき。

我は武の爲、家の爲、　汝は世の爲、道の爲、
つゝがなかれ。」と西東　露けき袖を分ちけり。

第三十課　故郷

人一度故郷を離るれば、故郷の風物は常に其の心中に往來す。嬉しき時にも故郷を思ひ、悲しき時にも亦故郷を思ふ。久しく異境に在りて故郷に歸れば、山川・草木悉く歡んで我を迎ふるの感あり。殊に業成り名遂げて之を故郷の父老に告ぐるは、人生の至樂なり。故に古來志

を立つる者、錦を着て故郷に歸るを希はざる者なし。故郷の慕はしきは、必ずしも山水の美なるが爲に非ず。又風土の住みよきが爲にも非ず。嚴寒不毛の北極の地に住める人も、百花咲滿つ南方溫暖の地に來りて、尙其の故郷を忘るゝこと能はずといふに非ずや。故郷の慕はしきは、祖先墳墓の地にして、我が幼時嬉戲せし處なればなり。祖先幾代此處に生活し、永く此處に眠れるを思へば、心無き山河も自ら情あり。我が嬉戲せし幼時の樂しき記憶を想ひ起せば、木石亦知友の感なくんば非ず。況や父母・兄弟・姉妹・親族・故舊の我を待つあるに於てをや。

故郷は我が出生の地を中心とすれども、其の範圍一定ならず。一郡より見れば、村は卽ち故郷なり。一縣より見れば、郡は卽ち故郷なり。全國より見れば、縣は卽ち故郷なり。世界より見れば、國は卽ち故郷なり。故に故郷を愛する心は卽ち國を愛する心なり。

故郷を愛する心は、故郷を遠ざかるに隨ひて益〻深きを加ふるものにして、我が領土を出でて遠く他國に在る時、其の最も强烈なるを覺ゆべし。彼の三笠山の歌を誦する者、誰か萬里異域の客として故郷の空を慕ひし仲麻呂の感慨を察せざらんや。

然れども今は昔と異なりて、通信・交通の機關發達し、數

十日にして世界を一周すべく、十數時間にして極遠の地にも音信を通ずべし。又世界各國は殆ど我が友邦ならざるはなく、到る處保護を受くるを以て、旅行するも事業を經營するも安全なり。されば各國民互に海外の發展を競ふ今日、徒に故郷に戀々として國内に小利を爭ふは、故郷を愛する所以に非ず、又國を愛する所以に非ず。强固なる目的と確實なる手段とを有する者は、盛に海外に雄飛して、國運の發展に貢獻すべし。骨を埋むる豈たゞ墳墓の地のみならんや。人間到る處青山あり。

高等小學讀本卷一終

大正十五年二月五日印刷
大正十五年二月十日發行
大正十五年二月十一日翻刻印刷
大正十五年三月十八日翻刻發行

高等小學讀本卷一
昭和十三年度時定價金拾貳錢

著作兼發行者　文部省

翻刻發行兼印刷者　東京書籍株式會社　代表者　石川正作
東京市王子區堀船町一丁目八百五十七番地

印刷所　東京書籍株式會社工場
東京市王子區堀船町一丁目八百五十七番地

發行所　東京書籍株式會社
東京市王子區堀船町一丁目八百五十七番地

大正十五年二月十六日
文部省檢査濟

著作權所有

壬生校

高

鈴

政

広島大学図書
2000018281